

マルコによる福音書 5章 35節～43節

2015年10月22日

古本 靖久

1、聖歌 295番 「愛する者の死を悼み」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 70 ページ）

4、テキストの位置

先月に引き続き、新共同訳聖書の小見出しでは、「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」となっているところです。	ガリラヤ湖 周辺での宣教 (奇跡)	4:35-41	自然を支配する
		5:1-20	異邦人の地で悪霊を追い出す
		5:21-24	ヤイロの信頼 (前半)
		5:25-34	イエスに寄り頼む女性の信頼
		5:35-43	ヤイロの信頼 (後半)
		6:1-6a	信頼できないナザレの人々
福音は異邦人へ	6:6b-	弟子たちの派遣	
先月も触れましたが、この二つの物語はもともと別々だったものを、マルコ福音書の著者が一つの物語として編集したと考えられています。			

前半ではイエス様の服に触れる女性のイエス様に対する信頼（新共同訳聖書では信仰）についてみていきました。イエス様は、イエス様にすがるしかない彼女が、壁を乗り越え自らの元に来た「信頼」を受け入れられました。

さて、この出来事と並行して、ヤイロの娘の物語は進んでいきます。これを読むわたしたちは、そこから何を感じ取ればよいのでしょうか。

<前回のあらすじ>

娘が死に瀕しているヤイロはイエス様の足元にひれ伏して娘をいやしてくれるように頼みます。イエス様はその言葉を聞いてヤイロの家へと向かうのですが、その途中で12年間出血の止まらない女性と出会います。彼女はイエス様の後ろからこっそりその服にふれ、いやされます。

しかし体の中から力が抜けるのを感じたイエス様は、自分の服に触った人物を捜し始めます。女性は震えながら、イエス様にすべてを話しました。

するとイエス様は女性の信じる心を認め、平和の内に行きなさいと告げられました。

5、節ごとに

◆ヤイロの信仰（後半）

5:35 イエス（彼）がまだ話しておられるときに、会堂長の家（ところ）から人々が来て言った（う）。「（あなたの）お嬢さんは亡くなりました。もう（どうして）、先生を（な お）煩わすには及ばないでしょう（のか）。」

会堂長ヤイロのことを少しおさらいしておきましょう。一般的に会堂長は裕福な人であったようです。また社会的にも影響力を持った人が多く、ユダヤ人社会の中ではとても高い地位にありました。

逆に 12 年間出血の止まらなかった女性は、医者にかかるために全財産を使い果たし、汚れた者とみなされ、人々から遠ざけられていた存在でした。つまり ヤイロとは対極にいた人物だといえます。

そのような女性がイエス様の服に触れたために、ヤイロの娘の所に向かっていたイエス様の歩みは止まりました。ヤイロはともかく他の人たちは、「なぜこのような女のために、イエス様はいつまでも時間を取っておられるのか」と憤っていたかもしれません。

その状況の中で、会堂長の家から人々が来て告げます。「お嬢さんは亡くなりました」と。この言葉は会堂長ヤイロに、「それでも信じるのか、否か」という問いを突きつけます。ヤイロの出した答えは、聖書には書かれていません。しかしわたしたちは自分の信仰生活と照らし合わせたときに、そのときのヤイロの心の状況を容易に想像することができるのです。

5:36 （しかし）イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない（な）。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。

イエス様は人々のそれらの言葉を、そばで聞いていました。人々はイエス様に対して言ったわけではないけれども、イエス様は横で聞いていたということでしょう。またはこの語を、「聞き過ごして」と訳すこともできます。その場合イエス様は、聞いてはいるけれども、あえて言われていることを無視した、という意味になります。

イエス様はヤイロに、「恐れるな、ただ信じなさい」と告げられます。ヤイロは今、目の前で奇跡的ないやしの行為を見ました。そのことを根拠に信じなさいというのでしょうか。

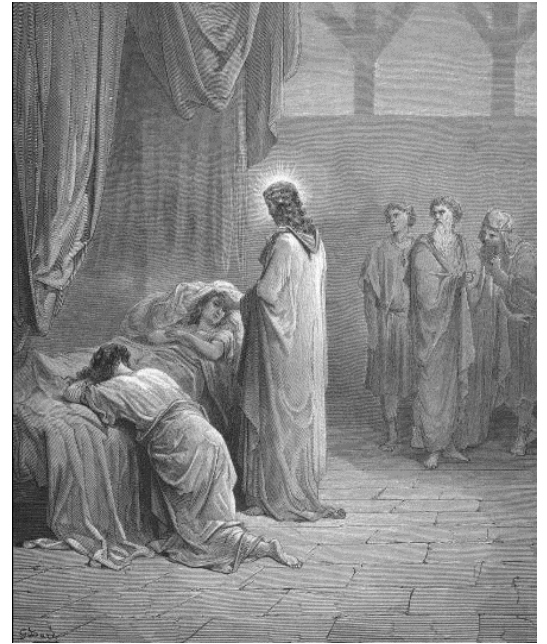
この「恐れるな」という言葉は、ヤイロにとっては大きな励ましの言葉です。この言葉がヤイロのイエス様に対する信頼を保ち、希望を生きたものにするのです。

5:37 そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて（一緒に）来ることをお許しにならなかった。

共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ福音書）には、イエス様に最初に従ったのは4人の漁師たちだと書かれています。すなわちシモン（ペトロ）とその兄弟アンデレ、そしてゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネです。

そのうちの3人、ペトロとヤコブとヨハネは、とても重要な場面に立ち会っていきます。かわいそうなのはアンデレですが。

たとえば9章2節～13節にある「イエスの姿が変わる」（イエスの変容）の場面には、「六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた」という記述があります。また「ゲツセマネで祈る」（14章32節～42節）においては、「そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた」と書かれています。



このように中心的な弟子たちだけを連れて行ったというのは、古い伝承に由来していると思われまふ。マルコ福音書が書かれた時代には、12弟子のうちユダは欠け、ヤコブはすでに殉教していました。しかし彼ら、特にイエス様に一番近い存在だった3人には、イエス様から特別な秘密が明かされていたと考えられていたのかもしれませんが。

5:38 （そして）一行は会堂長の家に着いた（来る）。（そして）イエス（彼）は人々が大声で泣きわめいて騒いで（叫んで）いるのを見て、

イエス様はヤイロの家に行き、人々が大声で泣き叫んでいる様子を見まふ。その人々は、家族や友人ではありませんでした。韓国でもお葬式の時に「泣き女」を雇う習慣があるようですが、同じようなしきたりが当時のユダヤにもあったそうです。

ミシュナ（律法の注解書のようなもの）には、イスラエルで最も貧乏な人間でも、その妻が死んだときには最低でも、「笛吹き二人と泣き女一人」を頼まないといけないとされていたそうです。ルカ7:32にも葬式の時に笛を吹く人の姿が描かれています。

つまり彼らは、家族の心の痛みに寄り添うことなく、ただ泣き叫んでいたともいえます。その様子をイエス様はご覧になりました。

5:39 (そして) 家の中に入り、人々(彼ら)に言われた(う)。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」

イエス様の答えは、彼らの常識を真っ向から否定するものでした。彼らはすでに死に引き渡された子どもの姿を見ていたのでしょう。

とは言いましても先ほど説明したように、ここで泣き騒いでいるのは職業として雇われた人々である可能性が高いため、実際に子どものそばにいた人は少なかったかもしれません。

しかしイエス様は、子どもは眠っているのだと言います。日本語には「眠る」という言葉を「死」と同じ意味として使うことがあります。

例えば葬送式の聖歌 292 番「静かにねむるわが友よ 別れの時は来たり」の歌詞を見ると、「死」を「眠る」と置き換えていることがわかります。

聖書が書かれたギリシア語にも、同じように「死」を意味する「眠る」という動詞(コイマオコイ)がありますが、ここで使われている「眠る」(カシュードー)は、文字通り睡眠を表す言葉です。ゲツセマネの園で弟子たちが眠ったときも、この語が使われました。

イエス様にとって、死は眠りとさほど変わらないものでしょうか。そうではありません。「恐れるな、ただ信じなさい」というイエス様の言葉と響きあっているようにも思います。



5:40 (そして) 人々(彼ら)はイエス(彼)をあざ笑った。しかし、イエス(彼)は皆(すべての人)を外に(追い)出し、子供の両親(父親と母親)と三人の弟子(自分と一緒にいた者)だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた(く)。

彼らはイエス様の言葉をあざ笑います。この笑いの裏に、「子どもは確かに死んだのだ」という事実が見え隠れします。

イエス様はそこにいた人たちを追い出します。この「追い出す」は非常に強い言葉で、外に放り出すというイメージです。神殿から商人を追い出した時もこの語が用いられています。

イエス様はわずかな人だけを連れて、子どもの所に行きます。それはイエス様が奇跡を行う人としてのみ人々に伝わってしまうのを防ぐためだったのかもしれませんが。

5:41 そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた（う）。これは（訳すと）、
「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。

イエス様は子どもの手を取り、「タリタ、クム」と言われます。「タリタ、クム」はアラム語です。イエス様はアラム語を話されていたと思われませんが、聖書の中には他にも、「エッファタ（開け）」や「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）」のように、アラム語をそのまま載せ、その説明（翻訳）を書いている箇所があります。

わたしたちが魔法の言葉を聞く時に、「開けゴマ」と言われるよりも「アブラカタブラ」の方が有難く感じるかもしれません。「テクマクマヤコン」と言われたら、不思議とその魔法が効いてしまうような気になるでしょう。（わたしだけかもしれませんが）

マルコ福音書の著者は、イエス様が発した決定的な言葉だけはそのまま取り入れたかったのかもしれませんが。

さて、「タリタ、クム」という言葉ですが、以前使っていました口語訳聖書では「タリタ、クミ」となっていました。「クム」は「立つ」という動詞の三人称男性命令形ですが、「クミ」は三人称女性命令形です。もともとは「クム」と書かれていたのを、アラム語の知識のある人が、女性だから「クミ」だろうと書き換えたのでしょうか。口語訳の時には、「クミ」を採用していたのですが、今では「クム」の方が原文に近いだろうと思われています。

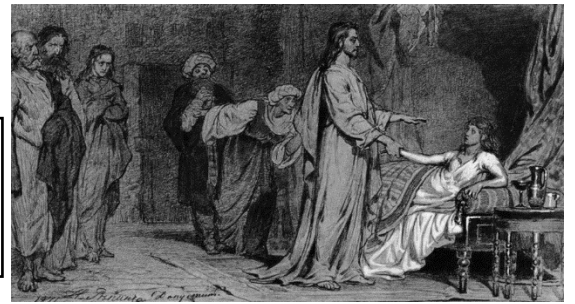
この節で大切なのは、「わたしはあなたに言う」という「タリタ、クム」の中にはない言葉が説明の中に付け加えられていることです。この言葉によって、イエス様の権威が強調されていきます。「タリタ、クム」と言ったから子どもが起き上がったのではなく、イエス様が彼女に言ったから、彼女は起き上がる事ができたのです。

5:42 （そして）少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々（彼ら）は（この上ない）驚きのあまり我を忘れた（に包まれた）。

彼女は起き上がって歩くことによって、自分がいやされたことを証明します。また人々の驚き様も、この奇跡がとんでもないことであったことを伝えます。

12年という年月は、出血が止まらない女性の病の期間とも一致します。家族に愛されていた子どもと人々から離れて暮らしていた女性。喜びと苦しみの期間です。しかしこの同じ日に、彼女たちはイエス様に会います。

5:43 (そして) イエス (彼) は (彼らに) このことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また(そして)、食べ物を少女 (彼女) に与えるようにと言われた。



イエス様は死んでいた彼女が生き返ったことを黙っておくようにと厳しく命じられます。しかし泣き女や家族、使いの者など、みんな少女が一度死んだ事実を知っているはずです。

それでもイエス様は、沈黙を守るようにと言われます。それはこの奇跡行為を、ただ驚くだけのことではないと伝えたいからです。マルコ福音書はイエス様の奇跡を多く取り上げますが、同時に奇跡を見ただけではイエス様の本当の姿が分からない人たちの姿も描きます。弟子たちなどもそうです。

本当にイエス様のことがわかるのは、復活のイエス様と出会う時です。その時に初めてイエス様とは何者なのか、そしてわたしたちとどう関わっておられるのか、理解できるのです。

<今日の箇所から>

女性のいやしの場面を見ている時のヤイロの心境はどうだったのでしょうか。せっかくイエス様が一緒に来てくれると思ったのに、途中で立ち止まってしまう。しかし、主導権は必ずイエス様が持っているということを、わたしたちは忘れてしまいがちです。祈ればすぐにでも何とかなる、自分だけのためにイエス様は働いてくださる。そのようにわたしたちは思い、また求めます。しかしイエス様は、いつもわたしたちの思うように働かれるわけではないのです。

なぜイエス様は今、祈りを聞いてくれないのか。そう思うことはよくあります。ヤイロもそのような気持ちでいたことでしょうか。しかしこのイエス様の声は聞こえるでしょうか。「恐れるな、ただ信じなさい」というイエス様の声が。

イエス様の服にでも触れることができれば、出血の止まらない女性はそう思いました。娘は死んだ、でもイエス様はただ信じろと言われている、ヤイロにはそう聞こえてきました。イエス様をただ信じる、そのことが、先月と今月の箇所で強調されていることなのです。

わたしたちも試されています。いつになったら聞いてくれるのか、この声は届いているのか、そう思うたびに、イエス様はわたしたちのそばに来て、言ってくださるのです。「恐れるな、ただ信じなさい」と。

今回の学びはこれで終わります。次回は 11 月 26 日(木)10 時 30 分からです。「信頼できないナザレの人々、弟子たちの派遣」(マルコ 6 : 1~13) について学んでいきます。